

## 平成 30 年度 2 学期終業式校長講話

校長 岩田 学

クリスマスを前に、東京有楽町にある東京国際フォーラムで開催された、「リベラル・アーツの時代に」という英語によるシンポジウムに出席して来ました。校名がそのままの東京学芸大学、教養学部を持つ東京大学、国際基督教大学、文理融合の慶應義塾大学 SFC、そして新たに長野県立大学グローバルなどが参加しました。

複雑化した現代社会では、ある特定分野の専門的な知識が求められる一方、幅広い知識を身につけ、異なる考え方やアプローチ方法を理解できるような総合力が必要とされています。集まったのは、さまざまな学問領域を自由にそして横断的に学ぶことで、実社会で活躍し豊かな人生を送ることができる学生の育成を目標としている大学・学部の教員と学生で、私も 3 日間英語のシャワーを浴びてきました。

さて、皆さんは、「リベラル・アーツ」という言葉を聞いたことかあるでしょうか。

「リベラル・アーツ」は、哲学者のソクラテスやプラトンが活躍していた古代ギリシアで生まれた概念を指す言葉で、多少相違はあるものの「教養」と理解してもいいのではないかと思います。

「リベラル・アーツ」の概念は、古代ローマに受け継がれ、七つの科目からなる「自由七科」セプテム・アルテス・リベラレス (septem artes liberales) として定義されるようになりました。自由七科は、主に言語に関わる三科目の「三学」(トリウィウム)と、主に数学に関わる四科目の「四科」(クワードリウィウム)との二つに分けられます。それぞれ、「三学」が文法・修辞学・弁証法(論理学)で、「四科」が算術・幾何・天文・音楽ということです。文法や論理学は何となく分かるのですが、修辞学というのは、「言葉を効果的に使って、適切に表現すること。また、美しく巧みな言葉で飾って表現すること。また、その技術。」(大辞林)を学ぶことです。音楽が数学に関する学問に分類されているのも おもしろいと思います。これらを学ぶことで、人間を良い意味で束縛から解放したり、生きるための力を身に付けたりすることができると考えられていました。

皆さんも、小学校入学以来、いろいろな教科を勉強して来ました。本校では、国語、地理歴史・公民、数学、理科、保健体育、芸術、外国語、家庭、情報、について学ぶことができますが、それらは、古代ローマの「自由七科」のうちの「四科」に当たるように思います。さすがに「情報」という教科は、コンピューターがなかった古代ローマでは必要なかったようにも思いますが、「情報」で学ぶ情報をよりよく表現する力(コミュニケーション能力)は、修辞学に当たるものです。

かつて、日本の社会では、国民がある特定分野の専門的な知識を身に付けることで生産性を高めるとともに、それによって大量生産、大量消費を促進することで、大きな経済成長を成し遂げてきました。しかし、人口減少が始まった現代においては今後大きな経済成長を見込むことができなくなります。この時代にこそ、基礎的な学力を身に付け、それを活用する能力、自ら課題を見つけ出し広い視野で物事を判断できる力、さらに自分の考えをきちんと伝える力を養うことが求められています。そのような力を新たに始まった「校外での学び」等を通して身に付けて来ました。これらも広い意味でのリベラル・アーツだと言えます。学び続けることが、よりよい人生を送るためには必要です。

最後になりますが、時間を積み重ねて学んできた 3 年生の皆さんには、新年早々にここまでの基礎的・教養的な学力をみるセンター試験があります。どうか、自分の力をきちんと答案に表現出来るよう、最後まで全力を尽くして合格を手にして欲しいと願っています。